

「ガジャマダ大学院生交流プログラム参加報告書」

京都大学経営管理大学院2年 藤原大豊

①学習成果（今回の派遣に参加する前とした後とで、留学、大学での学習、国際理解への意欲に関して、自分どのような変化が起きたか、今回の派遣に参加して、次の海外留学についてどのような関心・計画を持つようになったかなど）

今回の派遣参加で生まれて初めて海外に行った。もっと海外に行きたいと思った。特に途上国は何度行ってもいいと思った。ビジネスチャンスがたくさんある。現地の労働力を搾取し利益を得る気なのかという批判も受けそうだが、やり方しだいで日本の技術や製品が途上国での生活を豊かにすることに寄与することも間違いない。

街に人が溢れて道路も川も汚れていて悪臭がしていた。日本では考えられないことである。行く前から想定していたが、現実に目の当たりにすると解決しなければならないという思いが強くなる。日本でも昔はそうだった。私が子供の頃はそういう場所もあった近所の川はどぶ川で池は腐っていて悪臭がした。しかし、こんなにはひどくなかった。

競争原理やビジネスというものを環境問題や社会問題の解決にどのように利用できるかということを考えるいい機会になった。

②海外での経験

ジャカルタでは交通インフラの整備が追いついていないため、人が溢れかえっている。道は汚いし交通渋滞が慢性的で空気が汚い。息をしていると吐き気と目眩を感じた。しかし、不思議なもので2日目には慣れていった。

途上国といっても都市部の物価は高い。中心部のショッピングセンターではグローバルブランドの製品は何でも手に入るので生活には困らないだろう。建築物は巨大なものが多い。大阪ではグランフロントや阿倍野ハルカスの建築で一喜一憂しているが、ジャカルタ市内にはグランフロント大阪が何個もあるようなイメージである。スケールの違いとともに途上国の凄さを知った。

③プログラム内容

ジャガマダ大学との交流を深めるという目的は達成された。さらに国際交流基金、JASSO、JICの表敬訪問において、今後のフィールド調査や国際交流事業への協力の依頼という目的も達成された。海外での活動において現地に精通した組織や人の協力は必要不可欠であることから今回の成果は非常に意義深いものといえる。今回のプログラムは東アジアコースのみではなく京都大学全体にとっても有意義だったのではないだろうか。次回はJETROへの訪問も視野に入れているということが話題に出たが、訪問すれば必ずや良い結果をもたらすだろう。実際、今回のJICでの会話においてもJETROの資料が何度も参照されていたし、JETROは日本企業にとって重要な機関の一つなので大学にとっても関係構築は重要であると思われる。次回の派遣では訪問することを期待したい。個人的なところ言えば、私自身が会社員且つMBAの学生だということもあり、特にJICから獲得した情報は非常に有意義で事務局長との顔をつなげたことも非常に意義深い。

④進路への影響について

インドネシアの特に都市部においては住宅事情は悲惨で、とにかく住むところが足りていない。JICの事務局長は日本人向けのコンドミニアムに月家賃25万円で住んでいると言っていたが、とにかく建築の供給速度が需要

に追いついていないため、異常な住宅価格は高騰を見せているようである。

日本の住宅設備機器は諸外国に比べて短納期の建築を可能にしている。特にユニットバス技術は複数人の職人が数日かけて行う水廻りの施工を2人作業で1日で終えることができる。もし、ユニットバス技術をインドネシアに移転できれば建築の供給速度が上がり、住宅難を解決することに寄与できるだろう。

私はユニットバスの設計者として企業に所属していることもあり、卒業後はユニットバスをインドネシアのように住宅難に困っている国に持っていくことを仕事としたいと常々思っていた。

それが、インドネシアに入って自分の目で直接、建築物や建設中の現場を確認し、街に溢れる人の多さを確認したことによって、住宅難解決のためにユニットバスを途上国に広めることは私の中で「やりたいこと」から「やるべきこと」に変わった。